

攻防は君と共に中隊全員の忘るべからざる日なるべし
当時既に君は大腸を病みてありたるも病室の中にあり
蹶起せんとする姿未だ中隊長の心中を去来しあり貧劣
なる給養と不良なる水質は一般の健康を著しく低下せ
しめたるも補給意にまかせず患者後送の便乏しく激甚
なる任務に追われありたるものなり斯くてやむなく隊
治療を続行中病勢は悪化の一路を辿りたりその間玉碎
を賭せる中隊決戦防衛はよく反抗を破摧阻止せるも敵
は急遽桂林地区を奪取我が軍の背後をつかんとせり之
がため北上阻止の任を以て中隊また死守せる来賓を去
る日、君を柳州に後送君が回復し速かなる追及を念願
せるものなり蓋し六月十一日のことなり凶らざりき
翌十二日担送半ばにして病勢一変し永別せんとは君は
赤痢と紫斑病を併発し一七時三〇分牛岩郷周村付近に
て病没せり

明けて十三日君は部隊本部大灣墟に運ばれ荼毘に附
せられたり爾來激烈なる作戦行動間と雖も常に戦友の
胸に抱かれ中隊長と共にありき

今や終戦を宣せられ祖国の興亡と命を同じくし大命

のまにまに痛恨なる大陸の地を去るの日皇国の前途
愈々多難なるものあり然れども君が素志は新興日本の
礎として同志の胸中に永遠に生きてあらん安らげく眼
れかし

我々興国の先駆となりて明日の闘志を誓わんとす思
いて茲に至り遺族の方々の胸中を推察すれば心断腸た
るるも意つくす事能はず翼くは諒とせられんことを
ここに謹みて哀悼の微衷を捧ぐ

独立歩兵第六十六大隊第一中隊長

田中正巳

私の戦争体験記

静岡県 松本 久

昭和十七年八月中旬、春野町小学校講堂において徴
兵検査を受けた結果、甲種合格となりました。昭和十
八年四月一日、三重県久居町（現久居市）にありまし
た中部三八部隊に入営、第五中隊松田隊に配属され、

初年兵教育を受け、無事一期の検閲を終わり、軽機関銃班に編入され、射手に任せられました。

昭和十七年七月、どこへ行くとも知らされず軍用列車に乗り九州へ着きました。門司港より貨物船を改造した軍用船の船倉に入ったまま甲板に出てはならぬとの命令があり、入隊以来、友達になった同年兵とどこへ行くのかなど話しているうちに船が大きくゆれだしました。何時間か経ったころ、甲板に出てもよろしいとの命がありました。早速甲板に出て見ると右側に薄黒く見えるのが陸地で左側は水平線でした。大きな船に乗るのは生まれて初めてのこと、少々酔いをして食事美味しく食べられませんでした。船倉の中にばかりいるのでいつが夜か昼かわかりませんが、自分の時計と食事の配給でどうやら三日目の終わりごろと推察、下船準備の命令が出て装備を整えて待機しました。「全員甲板に集合せよ」とのことで初めて外の景色を見ました。上陸した所はニューブリテン島のココボという小さな港でした。私は歩兵第二三〇連隊（沼）

八九三〇部隊第二大隊第八中隊に編入され行動を開始

いたしました。その年の九月、暗号手要員として集合教育を受けるよう命ぜられ、十月に第二十八師団参謀部電報班に勤務いたしました。私のように電信技術も電報の打ち方も知らない者が何でこんな任務につくのか見当もつきませんでした。後で聞いたことですが、暗号手はその道にずぶの素人でなければ駄目だそうで、少しでも電信技術のあるものは打電技術にくせがあるので、全く経験のない者を徹底的に訓練させるのだからです。内容が難しく、それを記憶するのが並大抵の苦勞ではありませんでした。

陸軍暗号書第四号の熟知にはなお一層の苦難で、赤い小便が出るほどでした。電報内容についてはもちろん極秘同年兵同志でもこれを語ることは厳禁され、鼻をかんだ紙は必ず焼却しなければならず紙屑籠にでも捨てようものならきついお叱りを受けました。また電文に関する紙片を所持しており、身に危険を感じた時はその紙片を食べて必ず飲み込んでしまえと厳しい命令でありました。

ニューブリテン島ガバンガにおいて司令部勤務、そ

の後、司令部の移転によりナガナガ地区に転進いたしました。

当時ニューギニア海域は日本軍の制海域であり制空権も日本軍側にありました。ある日、日本の戦闘機と米機との空中戦が展開され、数分にして敵機を撃墜しました。我らは思わず歓呼の声を上げ万歳を連呼いたしました。参謀長田中大佐殿より大勝利の報告あり士気はいやが上にも高まりました。しかし、数日後にラバウル防衛司令部が爆破されたとの報により、(沼)情報所特設班が設置され暗号手の仕事も日ごとに忙しく日夜激務に追われました。

その頃は食糧事情もやや良く、米飯にタピオカという芋類を混合した物を食べておりました。二カ月ほどして再び司令部がマタラタという所に転進しました。ニューブリテン島陸上正面にあった米軍は豪軍と交代し、我が方は歩兵第二二九連隊(沼)八九二九部隊第一大隊が連日交戦、第三八師団は縦二百メートル、横百八十メートルという大きな壕を掘り、その中に師団長以下将兵六百名がたてこもり、敵の襲撃に備えまし

た。

敵上陸に際しては第三八師団は正面に備え、第一戦備として(月)兵団第十七師団、第二戦備として予備隊が当たるとの遊撃態勢を取り、私は戦闘司令部暗号手として勤務することになりました。ところが、なかなか敵上陸の兆しが見えないため、長期交戦の準備として食糧確保に農耕を始めることになり、私も得意な農耕の指導に当たりました。敵正面ゾーン支隊の思わぬ突撃失敗の事後処理暗号事務が急速に増え大変でした。参謀本部よりの矢継ぎ早の暗電に徹夜作業も度々でした。私たち下級暗号手には詳細はつかめませんが、参謀本部と現地司令官との意見が合わず多数の犠牲者が出たとか聞かされました。

暗号係将校は甲種幹部候補生出身者が多く、その学歴を見れば東大法学部とか早大外語科出とかとに角秀才揃いでした。陸士出將校とよく口喧嘩をしていました。歩工砲騎の御苦労は誠に察しても余りあることですが、通信暗号兵の目立たぬ存在も忘れることはできないと思います。

よつて我ら暗号隊の歌を別添付させていただきます。
私たちの仕事は普通通信兵が打電してよこした物を翻訳しなければなりません。例えば「333」とか「555」とか「777」とかの電文を訳すのです。しかも日中は電波妨害があつたり、また南方の特有のスクールにともなつた雷ありで、昼間はまるで役にたたず、夜間作業のみで、それが一番の苦しみでした。

ニューギニア島といえば全島激戦地と思えるでしょうが我々のおりました島はカンガルーの尻尾のような形をした半島のしかも本島より少し離れたニューブリテン島でした。ここもかつては日本軍が大きな犠牲を払つた所でしたが、米軍が島づたいに比島ひいては日本本土に接近すべく島伝い作戦に移つたためもあるのでしょうか、それに私は暗号手という任務がら常に司令部付きが多かつたため、直接戦火をあびるという事はありませんでした。元は軽機の射手で普通なら一番的にされるはずでしたのに、暗号手に選ばれたため一命を取り止めた、と申しても過言ではないでしょう。しかし、戦争に一番大事な事は情報の速時入手でしよ

う。そして彼我共に暗号の解説にあると思います。

やがてニューギニアで終戦を迎え、昭和二十一年五月に復員いたしました。名古屋港に入り、一通りの検査を受け、名古屋市の惨憺たる光景を眺めたとき、初めて日本の敗戦を痛感いたしました。

ラバウル小唄

一、さらばラバウルよ又来る迄は

しばし別れの涙がにじむ

恋しなつかしあの島みれば

椰子の葉かげに十字星

二、赤い夕陽が波間に沈む

此処はいづこそ赤道直下

故郷はるかに忘れはせぬぞ

胸にあふれる祖国愛

三、朝にたなびく花吹山の

男命の焦がれるけむり

燃えるくやしき恨みを呑んで

過ぎた忍苦の四年半

四、白い珊瑚に碎ける波は

意気だ熱だよ男の天地

見渡す限りの黄金の波に

楽士ラバウル拓けゆく

五、夕べ一人見上げる空に

南十字の憧れ一つ

そうだあの娘は輝く星座

何時の逢う日を夢にみる

六、船は出てゆくクレドナ沖を

かすむ北山ガゼルの岬

声をころして心で泣いて

戦友の面影目がうるむ

七、さらばラバウルよ又来る迄は

眠れ戦友柏母山ふもと

きつと君等の心をついで

明日の日本に生きてゆく

師団の精鋭つわものぞ

いざと言う時やいさぎよく

東海健児がもえてたつ

士官も兵も 皆ともに

気合に満ちて意気高し

二、俺等は 花の暗号手

昼夜勤務も壕の中

淡い椰子油のともしびで

組立て翻訳判読と

一刻争う送受信

扱う吾等が 任重し

三、耐えた忍んだ電報班

名に負うガ島の転進は

連れてゆきたいなきがらに

何れは死の道許せよと

涙の雨で抱く墓標

南十字も濡れている

四、熱情燃える暗号手

思いよらぬ敗戦は

沼電会の唄

一、我等は沼の 電波班

命捧げた亡き戦友の

浮かぶ瀬もない眠れまい

男のくやしき情けなき

君の名 幾度呼んだやら

五、今じゃ親睦 沼電会

固いきずなの戦友集い

一掬交す さかずに

あの時あの戦友あの山河

語るもなつかし過ぎし日の

心の故郷さまよわん

(一高寮歌の曲で歌います)

濠北ハルマヘラ通信隊

砲・銃爆撃に耐えて

栃木県 羽田 徳栄

私の軍隊の略歴の概要は次のとおりであります。

昭和十七年四月十日、現役兵トシ歩兵第一二九連隊入

営

同日 歩兵砲中隊編入

六月九日 東部六五部隊教育所ニ通信修業者トシテ

分遣ヲ命ズ

自十一月六日 至十一月一四日 秋期演習参加

昭和十八年五月六日 教育終了原隊復帰

同日 郡山着

六月二十一日 編制下令(昭和十八年軍令陸甲四五

号)

同日 歩兵第一二九連隊歩兵砲中隊ニ編入

十一月六日 輝第二一三〇部隊ニ転属ノタメ会津若

松出發

同日同日 輝第二一三〇部隊通信班ニ編入

同月九日 編制完結

同月十一日門司出發 同月十六日上海着

同月二十三日上海出發 十二月三日マニラ着

同月七日マニラ出發 同月十三日任地ハルマヘラ島

上陸(濠北派遣)

昭和十九年三月一日上等兵 同日精勤章